

Eureka VII

六年制通信 No.28 令和2年12月18日(金)号

ナボイ劇場

中2の道徳で性善説と性悪説を扱ったようですね。孔子 vs 荀子という構図で、昔から日本人はこの分け方が好きなようです。私は性善説だから孔子派だとか俺は荀子の性悪説が正しいと思うとか、私たちも若いころから何度もそんな話をしたように思います。ただ、言葉に「善」と「悪」が入っているので、特に荀子の方ですが、本来の意味を誤解されていますね。性善説を批判して性悪説ができたのですが、これらは人間は生まれながらに善である、生まれながらに悪である、といったそういう分け方ではありません。「悪」という字がちょっとね。本来「愚」、愚かであると言った方が正しいのではないかと私は思います。

わかりやすく言えば、性善説とは「人は放っておくと、あれをしなさい、これをしなさい、などと言われなくても、あるいは、これをしてはいけない、あれをしてはいけない、などと言われなくても、誰もがちゃんと正しい行いをするものだ」ということです。この場合の「人」というのは民衆、ま、私たちのことですな。従って、リーダーは細かいルールを作る必要はないということになります。孔子が言ったのはこのことです。何号か前の通信に、校則なんて「諸君は紳士である」だけで十分だと言ったクラーク博士を紹介しましたが、彼なんて絶対に性善説に立脚していますね。これとは逆に、いや「人は放っておくとロクなことはしない」と考えるのが性悪説で、人間のベースには「悪」があるという考えではなくて、人は愚かだから誰かリーダーが細かく指導してやらないといけない、規則も細かく作ってやらなくてはいけない、そういう考えですね。キリスト教なんてこれです。人間の始まりであるアダムとイブは禁じられたリンゴを食べてエデンの園を追放されるのですからね。ロクなことをしないわけです。人間の歴史はそこから始まると考えるのがキリスト教なのでから人間の始まりは「愚かな男女」というのが基本概念です。ちなみに急いでつけ加えますと蛇に唆されて最初にリンゴを食べたのはイブなんですね。それで、自分だけ食べたもんだから、そのために自分だけが追放されるのは嫌だから「これは私の推測です」ついでに男も道連れにしようと「これも私の推測です」アダムにも食べさせるわけです。女が禁を破り、男を道連れにする、こわっ。男は馬鹿だからリンゴを食べ、女ともども追放される。こわっ。これを愚かと言わずして何と言おうか。

人は放っておいたらどうするか、正しいことをすると考えるなら性善説、ロクなことはしないと考えるなら性悪説、私はそう考えています。そして性善説の集団では規則が緩やかで、性悪説の世界では規則（契約と言ってもいいでしょう）が全てとなり

ます。シェイクスピアの『ベニスの商人』は象徴的な話ですね。私自身はどうかと言えば、ルールは少ない方がいいと考えていますし、世の中にはバカなルールが、民衆は愚かであると考えているとしか思えないようなルールがあつて、それらを非常に嫌っていますので、性善説なんでしょうね、きっと。しかし、教育を受けた者にはそれにふさわしい行動（Educated Action）があると考え、君たちにもそう言っていますから、これは性悪説でしょうか。ま、どっちの面もあつて当然ですよ。

私は性善説や性悪説という文字を見ると、いつも二つの話を思い出します。一つは旧ソ連。当時のゴルバチョフ大統領が机を生産している工場へ視察に出かけたときのエピソードです。全体主義とは民衆を愚かなものだと考え一部の指導者の言うことに従うことを強要するのですから完全に性悪説です。そうすると時に非常に面白い規則が生まれるのです。私は笑ってしまいました。恐くもなりましたが。その工場では一日に作る机の「重さ」を決めていたのです。台数ではありません。「重さ」なのです。わかりますか。私も最初分かりませんでした。例えば一日に机を 10 トン作るのがノルマとされていたというのです。そうするとどうなるか。分厚い鉄板のまま溶接して、とても机と呼べる代物ではない、ほとんど鉄の塊のようなものを数台作って一日の作業を終えていたのです。わけのわからない指標とそれに基づくノルマがあつてそれらをクリアしていれば後はどうでもよいという、私の最も嫌いな員数主義がそこには見られました。作った机が使いやすいか、美しいか、丈夫か、そんな指標はありません。今日一日作った机の総重量は何トンか、そこだけが関心事になるんです。ゴルバチョフも工場長から説明を受けて、さすがに驚いていましたが、こんなこと日本では考えられませんよね。テレビに映る作業員たちはどんよりと曇った目をして、全く表情のない不気味な人々に見えました。

もう一つ。これも旧ソ連が関係しています。第二次大戦後、不当に捕虜とされた日本人がシベリアなどで強制労働をさせられた歴史は君たちも知っているでしょう。その中で数十名の日本人がウズベキスタンのナボイ劇場の修理を命じられました。彼らはどうしたか。現地の人に感動を与えるほどの働きぶり仕事の丁寧さを示したのです。ロシア人に見張られていてもいなくても働きぶりに変化がない、そのあたり他国の人には理解できないらしい。隙あらばサボろうとする、つまり性悪説が普通なんですね。しかし私たちの父祖の世代の日本人は違いました。自発的にいい仕事をしようとする、その労を惜しまぬ姿勢は多くの人の尊敬を集めたそうです。しかも後に地震があつたとき、ナボイ劇場だけが一切の破損がなかったそうです。私たちの父祖の世代はこのような人だったのです。性善説の塊ですね。あれこれ指図をされなくても自分の仕事の範囲は自分で考え、より良いものにしようとする。我が身を顧みて恥じ入ることが多いなあ。彼らなら、机を重さの基準で作れと言われても、きっと使いやすく美しい机を作ったに違いないですね。それが誇りというものです。君たちも、やがて仕事を持った時、自分の仕事にわけの分からない基準を当てられて、腹の立つことがあるかもしれません。でも、誇りをもって、たとえ誰に認められなくても、自発的にいい仕事をして下さい。ナボイ劇場を修復した父祖たちのように、黙々とね。